

広陵町教育委員会だより

令和8年度 9月号 9月10日発行

広陵町教育委員会
北葛城郡広陵町笠161番地2

TEL0745-43-6180 文責・編集 植村



飛ぶ鳥 明日香の里を 置きて去(い)なば 君があたりは 見えずかもあらむ

万葉集 巻1-78 元明天皇

飛ぶ鳥の明日香の里よ。この里をあとにして行ってしまったなら、あなたのいらっしゃるあたりはもう目にする事が出来なくなってしまうのではないだろうか。

防災について考えましょう！

9月に入り、早9日が経ちましたが、未だにうだるような暑さが続いています。長かった夏休みもあっという間に過ぎ去り、各学校園では、9月1日(火)に2学期の始業式を迎えました。校舎や園舎、運動場からは子どもたちの元気な声が聞こえています。

2学期は、3つの学期の中で、教育・保育活動において最も充実させる時期です。特に学校・園行事では、運動会、体育大会、音楽会、遠足・修学旅行などの学校

行事が目白押しで、私はこの学校行事において、子どもたちが主人公となり、いろいろな経験をする中で「やり遂げられた」とか「みんなと一緒にやり

きれた」などの達成感・成就感をもった時、そこには必ず自尊感情や自己肯定感が高まると思っています。この2学期こそ、さらなる子どもたちの成長を期待しています。

ところで、9月1日(火)は「防災の日」でした。大正12年(1923年)9月1日に起こった関東大震災にちなんで、そして、昭和34年(1959年)の伊勢湾台風などの大きな災害をきっかけに、昭和35年(1960年)の閣議で了解され制定されました。また、昭和58年(1983年)には、防災知識の普及や防災意識の高揚を図る目的で8月30日から9月5日にかけて「防災週間」が設定されました。

この時期、日頃から地域の危険箇所や避難先を確かめ、いざというときに助け合える備えを進めていく必要があります。

先日も全国各地で台風の影響と線状降水帯の発生によってゲリラ豪雨が続き、川の氾濫や道路の浸水による自動車の水没事故が多発しました。亡くなられた皆様にお悔やみを申し上げますとともに被災された皆様にお見舞いを申し上げます。

ちょうど15年前のこの時期、9月3日、4日に台風12号の影響で奈良県南部や和歌山県南部を中心に、広い範囲で記録的な大雨となり、紀伊半島大水害をもたらしました。被害を大きくしたのは、浸透した雨水によって山の斜面が岩盤ごと崩れる「深層崩壊」が原因で、県内では、五條市、天川村、十津川村で合わせて24人の死者・行方不明者を出しました。私がこの半年後に赴任した十津川村では、12人の尊い命が奪われました。その中には、十津川にある4つの中学校を統合して、十津川中学校として開校し、入学式を迎えるはず一人の男の子もはいていたのです。私はそのときの校長として、ずいぶん辛い想いをしたことが思い出されます。



村内各地で深層崩壊による土砂崩れの傷跡が残る中、平成24年4月5日に十津川中学校が開校しました。開校式が始まる前には、11社のマスコミが取材に来てインタビューを受けたことを覚えています。それは、十津川にあった4つの中学校(上野地、小原、折立、西川)が一つになったこと、紀伊半島大水害から半年後



に開校したこと、校舎や体育館は十津川産材の杉・檜をふんだんに使った純木造建築であったこと、そして、十津川村の観光大使であるさだまさしさんが作詞作曲した十津川中学校の校歌が披露されることが理由でした。開校後は、十津川村の復興のシンボルという位置づけで、先生や81人の子どもたちと共に生徒会が提案した「一致団結」というスローガンの下、日々の教育活動や行事とともに地域に出向いた様々な取組を通じて村を元気づけようがんばったように思います。わずか2年間の十津川での勤務でしたが、一番心に残っているのは、十津川の人たちの温かさ、そして自然災害等に立ち向かう気持ちと対応する防災教育の大切さを実感しました。

紀伊半島大水害の半年前に起こった東日本大震災、2度の熊本地震、能登半島地震、これまでに全国各地で発生している線状降水帯からの集中豪雨など、過去の教訓を語り継ぐとともに水害や土砂災害のリスク、避難場所・避難経路の確認、そして非常持ち出し品などの事前準備をお願いしたいと思います。



教育委員会の取組

教育講演会を開催しました！

8月28日(金)の午後2時5分から、広陵中央公民館かぐや姫ホールで、吉村町長をはじめ、社会教育委員、民生児童委員の皆様、町内の小中学校、幼稚園・こども園の先生方を対象にした教育講演会を開催しました。

今年の講演は、前関西学院大学教授で臨床心理士、学校カウンセラースーパーバイザーで、今年度から広陵町教育委員会のこころとまなびの相談室の相談員として勤務していただいている山本健治先生をお招きし行いました。

演題は、「不登校の子どもを理解と支援～その行動の意味と支援の在り方を探る～」と題して、講演をしていただきました。

令和6年度の全国国公立小中学校の不登校児童生徒数(年間30日以上欠席)は、12年連続で増加していて、357,000人あまりとなり、まさに憂慮すべき大きな社会問題となっています。本町でも同様な傾向で、近年の教育課題の一つになっています。この課題に対して、教師を中心に「どのように不登校を捉えるのか」「不登校になっている子どもの理解」「不登校 裏面へ



の要因」「不登校支援のポイント」など、子どもたちや保護者への関わり方や寄り添う姿勢、子どもとの関係づくりのための家庭訪問など、学校がどのように対応すべきかを熱く語っていただきました。また、不登校に向き合う教師の基本的な姿勢と態度について、これまで、数多くの子どもたちや保護者と関わってこられた豊富な経験とその経験に裏付けされた理論についても懇切丁寧に話していただきました。

下記に不登校の要因について記します。

1 学校生活に起因する不登校

人間関係（対友人、対教師、部活動の先輩・後輩など）のつまづき、学業不振、進路への不安など

2 家庭生活に起因する不登校

親の養育態度（過保護・過干渉）や家庭内不和によって子どもの社会性や自我の成長を阻害

3 本人の心身の状況に起因する不登校

本人の性格特性や心身の健康状態が直接の原因となるケース（不安障害、うつ状態、発達特性などが背景にある）、自信喪失や無力感

その他 複合的な要因による不登校、意図的な選択としての不登校、原因不明・分類困難な不登校がある。

また、山本先生が不登校支援のポイントとして、強調された中に、決して、「学校に戻すこと（再登校）」をゴールにしない、あくまでも、心のエネルギーを回復させることを目指すべきだという言葉が心に残っています。



次に、不登校に向き合う教師の基本的な姿勢や態度については、カウンセリング・マインドをもって、温かなまなざしで相手のありのままを受け入れようとする態度や共感的理解として、相手の視点から物事を捉えようとする姿勢や態度が大切であること。不登校支援においては、「教える、教えられる」という関係は不要で、子どもと寄り添う（子どもの気持ちを大事にする）姿勢、そして、子どもとの関係づくりのための定期的な家庭訪問をし、子どもの気持ちを読み取り、子どもとの間に信頼関係を築くこと。また、保護者の気持ちを理解したり、保護者の支えになったりと保護者との信頼関係を構築することが教師には求められると話されました。

最後に、子どもの成長は依存と自立の繰り返しであり、子どもの心を聴くことが大切で、不登校の理解のキーワードは「不安」であり、子どもの心に宿った不安をかき消そうとするのではなく、その不安を成長へと生かすことが大事だ。そして、支えることで重要なのは、安心感を与えることだと力説されました。

講演後の先生方の感想には、「学校に戻すことをゴールにしない、あくまでも、心のエネルギーを回復させることを目指すべき」という山本先生の言葉に少し気が楽になったという想いを書いている先生方が多かったです。また、「具体的な事例を聴く中で、自分が担任をしている子どもの顔が浮かび、2学期には示唆してもらった対応をしていきたい。」という想いを綴った感想も数多くありました。社会教育委員さんの感想には、「思春期の子どもたちは不安定な心の状態の中で、必死にがんばっていることがよく分かり、不安に寄り添い信じて待つことが大事だと理解できた。多くの先生が熱心に聴いていただいたことに安心

しました。」という感想をいただきました。

私がこれまでに関わった不登校児童生徒の実態やその解消に向けた取組からいつも感じているのは、心に大きな不安をもった一人の人間としてそっくりそのまま受け入れることが大切であり、山本先生も言うておられましたが、目標は「学校に来させること」ではなく、「子どもが元気になること」、そして、将来的には「自立した一人の社会人」となるよう支援することだと思っています。今回の講演会は、先生方にとって、不登校児童生徒にどう向き合うのかという示唆をいただいた素晴らしいものだったと感じています。

コミュニティ・スクール研修会を実施しました！

今年度も、地域と学校の連携・協働活動のための広陵町コミュニティ・スクール研修会を8月24日（月）に実施しました。各学校において、学校運営協議会の中心となる地域コーディネーターや学校関係者の資質向上を図るとともに、意見交流の場としての研修でした。

今回は、奈良県CSアドバイザーの竹原康彦先生をお招きし、「**地域と学校の連携・協働 ～コミュニティ・スクールの魅力～**」という演題で講義していただきました。

竹原先生は、奈良市立飛鳥中学校の校長のとき、東日本大震災の被災者に対し、「救援物資を送りたいから学校を貸してほしい」との地域の方からの声かけがコミュニティ・スクールを始めるきっかけとなったと話されました。その後、幼稚園・小学校・中学校を一つにした飛鳥式と言われる飛鳥C・S協議会を立ち上げられ、地域に根ざした様々な活動をして



られました。特に協議会の方々から、学校や地域を取り巻く様々な課題を出し合い、何をするのか、何ができるのかの熟議を重ね、地域の本物の人に学ぶ、あこがれる大人を見つける、子どもは地域で育てるという理念の下、地域・学校協働活動とコミュニティ・スクールが一体になった活動をしてこられたようです。

講義の後、4人1組の6グループに分かれてのグループワークがあり、①取組（以前していた、今している、この先したいこと）②子ども・学校・保護者・住民の特色（強み）と課題（弱み）③目指す像（子ども・学校・保護者・住民）について、自分の考えを付箋に書き出し、模造紙にグルーピングして貼り付け、話し合いました。その後、竹原先生からは、取組の数が多いからいいのではなく、話し合いができたことに意味があり、取組は何のためにするのか、何をを目指しているのかが大切で、PDCAを繰り返し実践していくこと。そして、特色・課題（現状）→変容の姿（目標）→目指す像（目的）を立てて取り組んでいくことが肝要であると話されました。また、子どもさんをお客さんにせず、子どもと大人をつなぐ活動をしてほしいとも話されました。



参加された方々の感想では、「自分のやるべきことや考えなど、方向性が見えてきた。」や「子どもたちのためにできることを学校・家庭・地域で一緒に考えていきたい。」「熟議していると互いの想いを知ることができた。」など、竹原先生が講義の中で力説されたことが書かれていました。